

144

2024 SPRING

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 15

鳥越畑村《金魚図》(部分)
江戸時代後期(19世紀)
紙本淡彩
108.7 × 33.7 cm

走泥社そう でい しゃ雑感

福富 幸(副管理者)

走泥社は昭和23(1948)年、京都の五条坂周辺で京焼に従事していた陶芸家八木一夫(1918-1979)、鈴木治(1926-2001)、山田光(1923-2001)、松井美介、叶哲夫(1927-1998)によって発足し、平成10(1998)年までの50年の長きにわたり戦後日本の陶芸界の一翼を担ってきた団体である。その活動は、今日では珍しくもなくなった「陶のオブジェ」、用をもたない「非器物」、戦後美術やいけばなにも使われた「前衛」陶芸と言われるものを社会に提示し認知させた、陶芸史にとって重要な団体だが、発足から75年、解散から25年が過ぎ、走泥社と聞いても知らない世代が増えたのではないだろうか。このたびの特別展は歴史になりつつある走泥社の発足から25年の前半期(-1973)を一区切りとし、同会に所属したできるだけ多くの作家の作品を網羅し、走泥社を包括的に振り返る展覧会である。

同会に属した作家は延べ67名(一覧参照)、知っている作家はどのくらいいるだろう？ 恥ずかしながら展覧会を担当する私も普段扱わない京焼の作家が多く、初めて見知った作家が半分以上。会員数は、創立メンバーであった松井と叶が2年で退会、その後、神崎建三が入会して4名となった昭和25(1950)年が最低で、少しずつメンバーが増え、昭和30-40年代は20名前後で推移、ちょうど前半期を過ぎた昭和49(1974)年32名となり、昭和55-56(1980-81)年がピークの37名、平成を迎えた1989年24名に減。辞めるものもいれば平成に入ってから参加した作家もいて、最後の年は29名が所属していたが、最終的には創立メンバーである鈴木と山田が解散を決意するに至ったようだ。この数字からは、この団体が戦後日本の復興期から高度成長期を経てバブル期までの社会の発展一時代と歩調があったものであったこと、本展で紹介する前半期はその後の会の伸長を準備していたものであることがうかがえる。

出品作家に、後に色絵磁器で国指定重要無形文化財保持者となった藤本能道(1919-1992)や萩焼の三輪龍作(龍氣生:1940-)の名前があり、少々驚いた。藤本は東京都出身で東京美術学校(現東京藝術大学)を卒業し富本憲吉に師事して色絵磁器を学んだ。一時期、鹿児島県の工芸研究所に勤めた後、昭和31(1956)年京都市立美術大学に赴任、昭和38(1963)年には東京藝術大学に移るので、ちょうど京都に居た時期に走泥社に参加したことになる。本展に出品されるのは、日本伝統工芸展に出品された典雅な花鳥画が施された色絵の壺や蓋物からは想像もつかない造形作品だ。また三輪は、萩焼の、現代陶芸の現役世代として活躍中だが、走泥社に参加した理由を、昭和42(1967)年に東京藝術大学大学院を修了したばかりの頃、彼の“尖った”作品を受け入れてくれるところは走泥社しかなかったから、と語る。代名詞ともなった陶のハイヒールも今では見慣れたものとなったが、当時は相当奇抜なものだったのだろう。

もうひとつ興味深いことは、走泥社には、滋賀や岐阜、佐賀などの窯業地から京都に来た作家、東京出身者もいたのだが、備前の作家がひとりも参加していないことだ。備前焼には用の器以外にも細工物や陶彫といったジャンルがあり、金重陶陽(1896-1967)を筆頭に茶陶から造形作品まで幅広く手がける作家はいたわけで、また、鈴木治が戦後一時期、備前で仕事をしていたことからつながりが全くなかったわけでもなく、京都に学んだ作家もいたが、誰も走泥社には参加しなかった。展覧会では、走泥社に先駆けて結成された青年作陶家集団や四耕会についても紹介するが、唯一岡山の作家として酒津焼出身で京都に学んだ岡本素六(1925-2013)が四耕会に参画していた。岡本は、長く岡山大学教育学部で指導にあたり、昭和30年代には岡山の前衛運動にも関わったが、県内にはこれといった作品が見つからない。このたび、滋賀県立陶芸の森陶芸館に所蔵される作品1点が里帰りする。四耕会資料に岡本の教え子でもある森才蔵(陶岳:1937-)の名前を見つけたが、会員ではなかったようだ。走泥社を再考すると同時に、岡山の前衛運動についても再考していく必要があるようだ。

【特別展】「走泥社再考—前衛陶芸が生まれた時代」(会期:2024年2月27日～4月7日)

「走泥社」会員一覧

作家名	参加年	退会(死去)年
叶 哲夫	1948	1949
鈴木 治	1948	1998
松井美介	1948	1949
八木一夫	1948	1979(没)
山田 光	1948	1998
神崎建三	1950	1965
門井嘉衛	1951	1982
中島 清	1951	1954, 1955
河合 紀	1952	1961
佐藤雅彦	1952	1988
村井次郎	1952	1982
河島浩三	1954	1988
森里忠男	1954	1967
辻 勘之	1955	1998
三浦篤雄	1955	1965
柘植敏吉	1956	1960
加藤達美	1957	1958
叶 敏	1957	1963
熊倉順吉	1957	1985
寺尾悦示	1957	1964
鳥羽克昌	1957	1998
原 照夫	1957	1963
藤本能道	1957	1963
田辺彩子	1958	1983
林 康夫	1962	1977
川上力三	1964	1998
川端信二	1964	1988
小西晴美	1964	1988
吉竹 弘	1964	1998
近藤清次	1965	1988
林 秀行	1965	1998
佐藤 敏	1966	1981
高野基夫	1966	1983
笹山忠保	1968	1986

作家名	参加年	退会(死去)年
人見政次	1968	1998
三輪龍作	1968	1975
宮永理吉	1970	1998
勝野博邦	1971	1998
里中英人	1971	1979
益田芳徳	1971	1998
緑川宏樹	1971	1996
金ヶ江和隆	1972	1998
安藤光一	1974	1998
石山麗子	1974	1984
星野 暁	1974	1981
前田勝代	1974	1998
柴田 繁	1975	1984
中西庸介	1976	1998
乗松剛毅	1976	1996
橋本由雄	1976	1981
クリスティーン・オ・ロックリン	1976	1979
平松八栄子	1978	1998
池沢和平	1980	1985
藤野 昭	1980	1998
森 一蔵	1980	1998
寄神宗美	1980	1998
伊藤 均	1986	1998
川村紗智子	1989	1998
松本 尚	1989	1998
友成 潔	1990	1998
井上 翠	1991	1998
小野 司	1991	1998
小野坂睦	1992	1998
豊山彬紘	1992	1998
門脇文雄	1996	1998
川路康典	1996	
萩内善晴	1998	

(計67名)



岡本素六《花器》1950年前後 滋賀県立陶芸の森陶芸館



三輪龍作《LOVE》1969年 高松市美術館

浦上春琴、備前の門人

森田 詩織(学芸員)

春琴(1779-1846)は岡山生まれの文人・浦上玉堂(1745-1820)の長子。早くから詩画に才を発揮、父の脱藩に伴い16歳で岡山を離れ、やがて京都に定住し職業画家として活躍した。温雅な筆致や色彩による作品は人気を博し、また明清画に関する知識も豊富で、頼山陽(1780-1832)らとともに関西文人サークルの主導的位置にあった*1。

春琴に画を学んだという人物は北陸から九州まで全国に存在した。旅した土地での交流や通信教育のような方法を通じて、自作を送ったり画論を教授したりと指導していたようだ。門人らの多くは専門画家ではないものの文人趣味を有し、絵筆をとるのみならず蒐集も行った。これが、近代に至るまで地方に文人画愛好家が多かったことにも通ずるであろう。また門人らの学習成果は春琴の著作『論画詩』などを読み解くうえでも参考になり、春琴周辺の作には今後も注目していきたい。

近年、当館は春琴に学んだとされる鳥越烟村(生没年不詳)、伊藤花竹(1805-81)の作品を複数受贈した。この二人*2について、受贈作品の一部とともに紹介する。

(1) 鳥越烟村

備前御野郡京殿村(現在の岡山市西市)生まれの岡山藩士であった。名は霖のちに澹、字は澹卿、通称は仙蔵。別号に梅圃がある。文雅を好み早くから家督を子息に譲って、梅澹の名で中国・九州地方を遊歴した。生没年は不詳だが、天保年間の終わり頃から弘化年間頃(1840年代)の作品が多い。

『池田家履歴略記続集』前編巻五によると文政元(1818)年に岡山を離れ、酒を好み絵筆をとり漂流のうちに生涯を終えたというが、田能村竹田は『竹田荘師友画録』(1833年頃執筆)に、画を春琴に学びその筆意を得たこと、かつて竹田のもとに遊んだこと、今は故郷に戻っていることを記す。また、明治時代の南画家・衣笠豪谷は『盖氏画説』に、春琴のほか劉雲泉の画法も慕ったと記している*3。それぞれの精査に至っていないが、画人として広く知られていたことがわかる。

《竹石図》(図1)に烟村は、ある人が春琴の著作『論画詩』中の「素樸」の二字について問い、良い紙を持ち出して墨竹図を求めた。自分は拙くも描き、詩を題したと記す。春琴『日省簿』によると、天保15年2月から烟村は姫路に滞在している。4月26日に「烟村自姫路寄書来」、本図は「端午前三日」とあるため、おそらくは姫路での作かと思われる。このころ春琴は『論画詩』を多方面に送っており、それを手にして疑問を抱いた人が烟村に問うていることは、周囲が彼を春琴門人と認識した一例とも言える。

『論画詩』中の「素樸」は未熟な状態でもまず守るべきものとされている*4。烟村は墨の濃淡を組み合わせ、勢いを制御しつつも伸びやかな筆で「素樸」を示している。



図1: 鳥越烟村《竹石図》
天保15(1844)年 紙本墨画
本作は現在状態が悪く、今回は展示できなかった。



現在当館は寄託品を含め、烟村による山水図の軸を5点、屏風を2点所蔵している。米点を多用した謹直な構図の山水が多い。また《金魚図》*5によると、没骨の淡彩画にも長けていたようである。

(2) 伊藤花竹

名は巖二、はじめ采節学人と号した。花竹も備前岡山藩士であり、藩校の舎監や副督監を務め、廃藩後も家塾を開いて教えを続けた。藤本鉄石(1816-63)は脱藩前後、花竹に画を学んだと伝わる。花竹は春琴門下とされるが、その交流は烟村ほどには残っておらず、岡山を度々訪ねた春琴の名が花竹の画業とともに語られるようになったことも考えられる。

花竹の書画は下津井(倉敷市)の豪商・荻野家に多く伝わっていた。同家の二代目・煙浦(1826-98)が文人趣味をもった人で、花竹に学んでいたためである*6。なお、当館所蔵の花竹《桜花小禽図》には八双裏に「雲煙堂／煙浦遺愛品」と記されている。この荻野家が所蔵した春琴《魚菜図》(1845年、所在不明)は岡山・円務院での作。煙浦の箱書きがあり、煙浦、花竹、春琴といった関係も推定されている*7。

花竹の作は、形にこだわらない動きのある筆に知識人らしさ、面的な賦彩に版本由来の要素が表れている。《山水図》(図2)は采節と署名し、潤いある画面に『芥子園画伝』初集巻二「燕仲穆風樹」を引用したような樹木を描く。前景に余白を配し、人物描写は無いものの観者を画面内へと誘う構図になっている。また《秋景山水図》(図3)には「学郭熙筆寫本谿山秋霽図／花竹翁巖」と記している。明確な郭熙様を見出し難いが、典型的な画法を描き入れず、目にした写し(または書籍類)から学んだと示している点が興味深い。

今回はご寄贈を機に備前の二人を紹介するに至ったが、それぞれの事跡や画業は分からない部分が未だ多い。さらなる作品資料の出現を待ちつつ、まずは人物情報や現存作例の分析を行い、春琴との関係を踏まえ近日中に稿を改めたい。

【岡山の美術】

令和5年度 第9期「浦上春琴と門人たち」

(会期:2024年2月25日～4月7日)

*1 岡山県立美術館・千葉市美術館『文人として生きる一浦上玉堂と春琴・秋琴父子の芸術』(2016年)、『浦上玉堂関係叢書』(学藝書院、2020-21年)。特に春琴の作画指導については『叢書』各巻の尾島治論文に詳しい。

*2 基本事項は『岡山県人名辞書』(1918年)、『岡山市史美術・映画編』(1962年)、『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社、1994年)を参考に、各史料によって補った。

*3 八田真理子「衣笠豪谷関係資料」とその意義―『盖氏画説』に示された明治前期南画界への主張を踏まえて』(『岡山県立美術館紀要』10号、2019年)

*4 竹谷長二郎「文人画論―浦上春琴『論画詩』評釈」(明治書院、1988年)、59-61頁

*5 本号表紙掲載作、解説は7頁。宮崎法子「落花游魚図―劉宗から惲寿平へ、そして椿椿山へ」(『実践女子大学美術史学』36号、2022年)を参照した。

*6 守安收「倉敷・下津井荻野コレクションの成立」(荻野美術館『荻野美術館名品選』、1991年)

*7 星野鈴「浦上春琴筆 魚菜図」(『國華』953号、1972年)



(左から) 図2: 伊藤花竹《山水図》慶応2(1866)年 紙本墨画
図3: 伊藤花竹《秋景山水図》19世紀 絹本墨画淡彩

やさしい日本語でアートを楽しむワークショップ —伝統工芸でつながる あなたと私の部屋—

岡本 裕子(主任学芸員)

開館35周年を迎えた今年度、ミュージアムが社会の一員として社会課題に対してどのようなことができるのか、参加者とともを考えるプログラムの一つとして「やさしい日本語(以下「やさ日」)×ミュージアム事業」*1を始めました。背景には、在留外国人数の増加があります。出入国在留管理庁は、2023年6月末の時点で在留外国人数は322万3858人だったと発表し、22年末から4.8%増の14万8645人プラスで過去最高であることが報じられました。そして、岡山県における在留外国人数は、2022年12月末現在32,042人で、21年末に比べて2,607人増加し過去最高になったという統計が県のホームページに掲載されていました。私自身「やさしい日本語」という言葉を耳にする機会が増えてきたと感じています。

この度、高尾戸美氏*2を講師に迎えて「やさ日」でアートを楽しむワークショップ—伝統工芸でつながるあなたと私の部屋—を実施しました*3。留学生や外国にルーツを持つ18歳以上の人と、プログラムに興味を持つ18歳以上の人を対象とした今回のねらいは、次の3つです。

- ① スタッフと参加者同士がコミュニケーションを図るために「やさ日」を使う
- ② 伝統工芸展*4をみるだけでなく、伝統工芸作品を自分の家(部屋)に飾ることを想像して「みる」ことをとおして自分事として楽しむ
- ③ 自分の「推し」を「やさ日」を使って言葉にすることで、母語が異なる参加者同士で交流し、コミュニケーションツールとしての「やさ日」の可能性を実感する

参加者*5は、「自分の故郷の景色と重ねて」「自分の部屋の色合いとのバランスで」「自分の部屋に置きたい場所と作品の大きさを考えて」「どのように使うか(用)を考えて」などの視点で、「推し」の作品を選び交流しました。参加者アンケートからは、とても楽しかった(7人)、楽しかった(1人)との回答が寄せられました(10人中8人回答)。その理由の一つとして「伝統工芸品はもともと専門用語がたくさんある。職人の方から説明があるが全然わからない。やさしい日本語から勉強すれば、自分も伝統工芸品の知識が得られるし、他の人と交流もできる」という意見がありました。外国にルーツを持つ人だけでなく、日本語を母語とする私たちも「やさ日」を理解し、交流するためのツールとして積極的に身に付ける必要があると感じました。また、「やさ日」は、外国にルーツを持つ人だけでなく、アートやミュージアムにはじめてふれる人も含めた潜在的利用者のアクセシビリティを高める可能性も持っていると感じました。今後も継続して実施する企画を立てています。是非誘い合わせてご参加ください。

今回の取り組みをとおして、ミュージアムという場を活かした「やさ日×ミュージアム」に継続して取り組むことは、ミュージアムが地域社会に存在/存続する意味の一つになりうるのではないかと思います。単独で取り組むのではなく、近隣のミュージアム等とも連携して取り組むことができれば、その可能性はもっと広がるのではないのでしょうか。

- *1:「令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業」、並びに「第21回おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA!プログラム」の一環として実施。
- *2: 合同会社マーブルワークショップ代表
- *3: 2023年11月25日(土)実施
- *4: 第70回日本伝統工芸展岡山展(会期:2023年11月16日-12月3日)
- *5: 外国にルーツを持つ留学生(帰国子女含む)7人と日本語を母語とする3人



展覧会スケジュール

3月
March

2月27日|火|-4月7日|日|

【特別展】

走泥社再考—前衛陶芸が生まれた時代

1948年に八木一夫、叶哲夫、山田光、松井美介、鈴木治の5人で結成された走泥社は、会員の入れ替わりを経ながら50年間にわたり日本の陶芸界を牽引してきました。特にその重要性は前半期にあり、本展では走泥社結成25年となる1973年までを主たる対象とし、走泥社と同時期に前衛陶芸運動を展開した四耕会の作品なども合わせて展示し、日本の前衛陶芸が確立していくうえで中心的な役割を果たした走泥社の活動の意味を再検証するものです。

*最新情報は岡山県立美術館ホームページをご確認ください。

<https://okayama-kenbi.info>

3月16日|土| 14:00-15:30

美術館講座 「前衛陶芸が生まれた時代—陶芸といけばな」

講師 福富幸(副管理者・学芸課長事務取扱)
会場 地下1階講義室(当日先着50名) ※要観覧券

3月20日|水・祝| 14:00-15:30

記念講演会 「今、なぜ走泥社なのか」

講師 大長智広氏(京都国立近代美術館主任研究員)
会場 2階ホール(当日先着200名) ※要観覧券

3月30日|土| 18:00-18:30

美術の夕べ 「走泥社再考—前衛陶芸が生まれた時代」展を見る

講師 福富幸(副管理者・学芸課長事務取扱)
会場 地下1階展示室 ※要観覧券

4月
April

4月19日|金|-5月26日|日|

【特別展】

生誕80年・没後20年記念

小林正和とその時代

—ファイバー・アート、その向こうへ

小林正和(1944-2004)は、京都に生まれ、1970年代後半から2000年代にかけて、ファイバーアート(繊維造形)の第一人者として国内外で活躍、世界的にも高い評価を受けました。1995年からは岡山県立大学で教授を務め、後進の指導にあたりました。本展は、小林の生誕80年・没後20年を記念する回顧展で、小林の代表作や関連資料とともに、同時代で活躍した作家たちの作品を加え、日本のファイバーアートの展開を紹介します。

5月
May

6月
June

6月7日|金|-7月7日|日|

【特別展】

北斎と広重 富嶽三十六景への挑戦

江戸東京博物館コレクションより

浮世絵風景画の名手である葛飾北斎(1760-1849)と歌川広重(1797-1858)。大胆な構図で知られる北斎、叙情性豊かな描写が際立つ広重、他の追随を許さないこの二人は、いかにして名作を生み出したのでしょうか。本展では、江戸東京博物館の所蔵する作品から、北斎の《富嶽三十六景》全46点のほか、《東海道五拾三次之内》《名所江戸百景》といった広重風景画の名作など、計224点を一挙公開し、二人の絵師の挑戦に迫ります。

収蔵品の紹介 Vol. 15

鳥越烟村《金魚図》
江戸時代後期(19世紀)
純本淡彩 108.7×33.7cm

水中の魚は中国・宋代の頃より描かれ、吉祥性のある画題としても幅広い層に好まれた。没骨による魚図は暉寿平、また椿椿山に連なる。一方、金魚図は近代によく見られ、本図の制作経緯や目的は不明点が残る。魚図に多い流麗な細長い姿とは異なる色鮮やかで丸々とした金魚が愛らしい。(森田)



盆栽始めました

守安 収

新年早々、盆栽を始めました。紅葉、楓、皐に文人仕立ての松の4種。かつて大学で指導した学生のお父さんからのいただきものです。私には20年近く前、高松市鬼無町(日本有数の盆栽の産地)で立派な形姿にしては驚くほど安価な松の盆栽を一鉢購入したものの、半年で見事な枯松に変身させたという黒歴史があります。妻からは水遣り不足だとして、「仕事を辞めるまでは駄目」と言い渡されました。この度はその禁を破り、少し本気になった二度目の初心者は、ベンチにペンキを塗った自製の台に載せて体裁を整え、これからの剪定や針金掛けはどうしようかと思案中。▼私は、人も植物も自然体でそのまま伸びていくことを重んじます。こちらの思惑や都合で無理やり固定したり、屈曲させたりするのは控えるべきと考えてきました。もっともそれは格好をつけた言い分で、根っから横着者なので云々いえるような人間ではないのが真相。それなら盆栽は真逆じゃないのかと突っ込まれそう。でもつらつら思うに、展覧会に企画者の想いが端々に出ることは否めません。開催準備中は次から次へと課題が際限なしに現れるとはいえ、時間に迫られて否応なしに仕上げます。故に積み残しや新たな情報が蓄積されてくると、再び完成形を目指したくなります。二度目が実現できたら幸せですが、たぶんそれでも満足できないでしょう。他方、盆栽は植物に手間と時間をかけて作り上げていきますが、展覧会のように一区切りはできず完成に至るということはありません。微かであっても日々変化する姿を眺めんと手入れするのもまた楽しからずやと思いたいですね。しかし数日留守をした時、自力で動けない盆栽に誰が水遣りするのか見当が付きません。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

年度が変わる前のこの時期は、次回の展示の準備を行いながら、来年度の展覧会に係る仕事にも追われるという、師走よりも忙しさが極まる頃合いだと毎年思います。そんな新年度を目前に控えた今号の表紙を飾っているのは鳥越烟村の《金魚図》。金魚といえば夏をイメージされる方も多いと思いますが、実は3月3日は「金魚の日」でもあり、江戸時代に雛人形とともに金魚鉢が飾られていたことから、桃の節句と同日に制定されました。本作も、今期の「岡山の美術」展で紹介しておりますので、ご来館の際は展示室でも春をお楽しみいただけたらと思います。